

## 故渥美和彦先生を偲んで

許 俊 鋭

東京都健康長寿医療センターセンター長

渥美和彦先生の自伝『人工心臓 —未知なるミクロコスモスへの挑戦』(三田出版会刊)は、私の座右の銘である。東京大学(以下、東大)医学部木本外科(木本誠二教授)に入局して4年目(1958年)に、渥美先生は「人工内臓研究会」を立ち上げ人工心臓研究をスタートした。東大工学部と協力して1960年に人工心臓によるイヌの生存5.5時間を達成し、1980年にはヤギの生存288日の世界記録を達成した。同年5月に日本初の東大型ventricular assist device (VAD)の臨床応用が三井記念病院で実施され、3日間の生存を得た。爾来40年、今日では第2・第3世代の植込型left ventricular assist device (LVAD)時代を迎え、VAD補助でヒトが10年以上生存する時代を迎えた。1960年からの20年に及ぶ東大人工心臓研究グループの血の滲むような努力を基礎にスタートした日本の人工心臓研究、その後40年にわたる世界の人工心臓研究者の努力による輝かしい金字塔と言えよう。渥美先生は、人工心臓について「治療のための道具というよりは、外出して散歩ができ、仕事や趣味に打ち込むといった普通の生活の質が保証され、しかも健康が確保される道具」と述べられ、今日でいうDestination Therapyの概念を「究極の人工心臓の姿」としてイメージしておられた。

私は学生時代、東大医学部医用電子研究施設で「ヤギに装着された人工心臓」に魅せられ、卒後は人工心臓の臨床応用を夢見て三井記念病院外科に入局した。三井記念病院では日々のハードな外科研修の合間を縫って、夜はポート部の先輩である高本眞一先生の補助循環の実験を手伝い、東大型VADの臨床応用の準備をした。1980年3月に開催された熱海での第8回「人工心臓と補助循環懇話会(AH・ACの会)」の夜の席で国立循環器病センターの曲直部寿夫病院長(当時)が飛ばされた檄は、今も鮮明に記憶している。「東大VAD完成度はもう臨床応用の域に到達している。若い諸君、勇気をもって臨床に進もうではないか!!!」、それまで三井記念病院で準備をしてきた私は、その言葉に体が打ち震えるほどの感銘を受けた。2か月後の1980年5月、



図1 第5回国際人工臓器学会学術大会(IFAO, 2013年)での英語スピーチ

心胸比85%の末期連合弁膜症の患者が周術期心筋梗塞のためveno-arterial bypass (VAB) + intra-aortic balloon pumping (IABP) 補助となり、2日後にVAB離脱困難となったため、渥美先生の指導の下、東大型VADを装着した。私が入局6年目の心臓外科チーフレジデントの時であった。その後40年間、私は渥美先生をはじめ多くの諸先輩の指導を頂き、人工心臓一筋の心臓外科医人生を歩んできた。渥美先生は「わが人生の師」である。

渥美先生は、1963年に初めて乗り込んだ第9回米人工臓器学会議(ASAIO)での質疑応答で「Dr. Atsumi answered in Japanese」と文献に記録されたことを挙げられ、常々「日本人研究者にとって英語の壁は厚い」とおっしゃっていた。しかし、私が会長を務めさせて頂いた2013年の第5回国際人工臓器学会学術大会(IFAO)のGala Dinnerの席で、85歳になられた渥美先生が「日本における人工心臓開発の創成期」に関して英語で素晴らしいスピーチをされ、聴衆に深い感銘を与えた(図1)。渥美先生のパイオニア精神と人工心臓開発における大きな貢献に感謝しつつ、心よりご冥福をお祈りします。